

月 -

復命書

2009年11月23日

新政会 代表
望月 厚司 様

議員名 佐藤成子

下記のとおり、政務調査費による視察を実施したので、ご報告します。

1 日 時	2009年11月13日(金)～11月20日(金)	
2 視 察 先	(1 都 市 名 視 察 先) 施 設 等	平成21年度 ストックトン市訪問親善使節団
	(2 対 応 者)	静岡市・ストックトン市 静岡市民・ストックトン市民
3 目 的	<p>ストックトン市と旧清水市とは、1959年3月9日に姉妹都市提携を交わして以来、実に40年近く交流を続け、平成15年静岡市との合併後も交流は継続されてきた。提携のきっかけは、昭和33年5月清水市長が上京の際、国際港湾協会中央事務局で来日中のストックトン港庁長官と会談。両市が持つ港湾整備を基礎とする近代的経済力を備えた都市として共通の性格があるとして姉妹都市提携の話が持ち上がり、清水市長は市議会全員協議会に諮り、姉妹都市提携を申し入れ、ストックトン市議会でも受諾議決が行われ、清水・ストックトン友好委員会が発足10月。清水港開港60周年・市制35周年記念行事を催すにあたり、ストックトン市長夫妻他を迎え、都市提携宣言の交換が行われ姉妹都市になった。この長い歴史・50年の年月の中で培われてきた両市の友好を更に深めるとともに、この友好都市を支え続けてきた人々と、その歴史を振り返り、親交を深める。ストックトン市の市民のみなさんは10月に静岡を訪れている。その返礼としても静岡市民が訪れた。</p>	

(調査事項・調査結果を具体的に)

11月13日(金)

『バスで成田へ移動・全日空でサンフランシスコへ』

17時06分発NH-008で、サンフランシスコ空港へ。飛行時間9時間余り。午前9時40分着。サマーテールブリッジを渡って(サンフランシスコで1番長い橋)2時間余り、バスにて

ストックトン市へ。朝早くから、かなりハードなバス移動。ホテルにチェックイン、程無く、記念夕食会へ。

『50周年記念レセプション・ストックトンカントリークラブにて』

150人余りの正装した参加者が懐かしそうに大集合。ストックトン市は静岡市以外に5市とも姉妹都市提携をしているのでそれらの方々も参加され、50周年を一緒に祝い、盛会でした。

もちろんストックトン市のアン・ジョンソン市長の列席を仰ぎ、主な各都市のメイヤーも出席。これまで関わった関係者など、久しぶりの再会の方々も含めて、とても盛り上がりのあるレセプションでした。中でも、これまでの、功労者、竹内ケヅ市の軌跡をたどり、日本との友好を深めたことを参加者全員で大きな拍手を送りました。

私の隣テーブルの方は、47年前、短大を卒業して留学し、そのまま現地の2世の方と結婚し、この地に永住しているとのことでした。当時は、今生の別れと言われて渡航したそうですが、今は何度も日本を行ったり来たりしているということでした。その人の人生を伺うことができとても有意義な時間でした。そこかしこで、再会を喜ぶ光景が見受けられ、この市民一人一人の思いこそが姉妹都市の心だと実感しました。

『竹内ケヅ氏の生歴と功績』

竹内氏は18歳の時留学先の日本から、アメリカ国籍を持っていたため追放された。3年後アメリカ政府からも敵とみなされ、カリフォルニア州のツールク強制収容所で4年間過ごしている。この経験が姉妹都市提携の情熱につながっている。というのは、彼の両親は、「その国に生まれれば、その国に忠実になれ、その国のために役に立ち、友になれ」と竹内氏を育てたという。

4 内 容

1950年姉妹都市の提携に向けて、竹内氏は日本人コミュニティの先頭に立ち、ストックトンの代表として日本に手紙を書き、清水に何度も足を運んだといひます。最後の訪問は清水と静岡の合併の直後だった。竹内氏は、4歳の時に姉、弟とともに日本の祖父母のもとに送られて、日本の文化の中で育った。収容所で日本語を教え、そこで、グレース夫人と出会い結婚。戦後、ストックトンに移り住み造園業を営んだ。その後、チャーターウエイフロリストを開業。それとともに、世界5都市（静岡市以外）との姉妹都市協会を支えてきた。毎年9つもの様々な文化の伝統を楽しむ2万人参加する、アスパラガスフェスティバルを開催、交流促進活動に努めてきた。日本からの留学生には、日本食の弁当を用意する心配りをいつもされていたという。御子さんのデリック・タケウチ氏は、『日本文化は私たちの周りのいたるところにある。それは父が私たちに浸透させてきたからだ。私は、感情や文化を、様々な国の人たちが日夜問わず訪れる我が家の日常から理解し始めた、世界に出て、いろいろな人に出会うきっかけを教えてくれた』という。彼ら2人の御子さんは、国際弁護士に成長した。『何をするにも、決してあきらめるな。人の後ろについていくのではなく、人の前一步前を歩き、正しい事をしなさい。そうすれば、人々とはついてくる』祖父母の教えが竹内氏に伝わり、その子供に、しっかりと伝えられている。この竹内氏の歩んだ道がずーと続くことを願う。アン、ジョンストン市長は“彼は、ストックトンの心です。なくてはならない存在です”と述べた。いつも行動することでその思いを伝えてきた竹内氏。『とてもとても幸せだ』と記念の石碑の前で輝いていた。

11月14日(土)

『ストックトン市交流事業

“静岡の石”設置と桜の植樹』

竹内氏は、日本に留学していた頃、友人と2日ばかりで、富士山に登頂し、山頂で見た御来光は、経験のない光景で今でも心に焼き付いているといひます。この度、御縁があり、その富士山の岩を日本から送られ、このルイズパーク（妖精の森）の脇に取り付けられることになったのだ。この岩をはさんで、歩道には、桜が植えられた。竹内氏は、2度の心臓手術を受けていて、現在89歳。今日は、この取り付けの監督をされた。この上

ない笑顔であった。もちろん、アン・ジョンストン市長も同席され華を添えた。

『ナパ・ワイナリー（ワインの里）視察』

ストックトンは、サンフランシスコ湾に注ぐ、サンホーキン川のデルタ地帯にあり、農産物関連の食品工業が盛んです。柑橘類の特産品も豊富なところ。特に、葡萄葉、果樹生産の40%を占め、この葡萄から製造されるワインはカルフォルニアワインとして、その品質の良さを世界に広めています。工場を視察。機械化されているとは思えない簡単な行程でした。また、日本では考えられない衛生面の管理でした。壊れたままの機械がそのまま置いてあったりしてましたし、葡萄畑はかなりの広さで驚きましたが、工場の敷地は狭いのにびっくりでした。

『急遽決まった、ローリービル氏宅でのピザパーティー』

池に面した瀟洒なご自宅。50人ほどが出たり入ったり気さくな自宅開放の仕方。ピザの大きさにもびっくり。一人ひとり、かなり親密なコミュニケーションが取れました。私は、来夏、日本に留学を予定している高校生が、アニメファンとのことで、お願いして、紙皿に、日本アニメ、ドラゴンボールを書いてもらいました。再会の際、見せたらいいと思っています。

11月15日（日）

『ホームビジット・市内視察』

奥さまは教師、旦那様は弁護士のキャシーさん宅にお邪魔しました。庭付きのこじんまりとしたお宅。中学生の娘さんとお会いしました。奥さんは交換教師として日本に滞在した経験があるので日本語はペラペラ。旦那さまにはお会いできず残念。部屋の中にあちこちに、小さな日本文化のグッズが置いてありました。小紋柄のバレンのお土産を、お子様はとても喜んでくれました。博物館や、民俗館、シティー公園、ショッピングセンター、ドラックストアなどに出掛けました。右側通行はどれも慣れません。車がぶつかりそうな感じです。民俗館で働いていた80歳過ぎのボランティアの方の元気だったこと。公園を行きかう子リスの可愛かったこと。博物館・民俗館共、自分たちの歴史に誇りを持ち、継承していることに感心しました。

『さよならパーティー～仏教会講堂～』

いよいよストックトンの皆様とお別れする時に。150人余りの人達が三々五々、自慢の御手製料理を持って参集。広い広い

講堂が、ストックトンの人々の真心でいっぱいになりました。自慢の喉を披露していただいたり、思い出の3日間や、この50年の懐かしい話に花が咲きました。私たち静岡からもお返しの心を、踊りに託してお伝えしました。ストックトンの皆様と想いを一つにした瞬間でした。又の再会を約束して、幕を閉じました。私は、日本に留学する彼女と、日本で再会することをしっかりと指切りしてお別れしました。

11月16日(月)

『ユナイテッド航空にてニューヨークへ移動・到着後バスでホテルへ スtocktonとの時間差3時間、日本との時間差14時間』

空港までの高原のバス移動でびっくり。高原一面風力発電機が立ち並んでいた。圧巻であった。日本が太刀打ちできるものではない。広い土地があればこそ、エネルギー転換が、ある程度可能だ。これでも広いアメリカでは、まだまだ足りない。いかに、温暖化防止政策が大変なことか実感した。

11月17日(火)

『ニューヨーク市内視察・国連ビル』

ここは2000年のニューヨーク国連女性会議以来2度目の訪問になる。入館前いつも思うこと。各国の旗が仲良く風に靡いているのに、なんで人間同士もこの様に仲良くできないのだろうか？拳銃の先が閉じられている拳銃のモニュメントと大きな地球儀が目に残る。国連総会場で、座ってみた。ここで世界の平和のことが決められていると思うと常任理事国であることの意味がよく理解できた。日本ももう少し国連で力が発揮できるようにならなければと痛感した。それでも、この中で1600名の日本人が活躍しているとのことだ。館内には、原爆を受けた展示品や、今でも戦争している国の様子が、世界地図で示されていた。説明する方の思いが伝わってきた。いつも犠牲になるのは、子供たち。本当に戦争をなくさなければと思った。日本から贈られた、平和の鐘が象徴的だった。

『ジャパンソサエティー訪問』

ニューヨークに設立されたアメリカの民間の非営利団体で、全米唯一の規模を誇る日米交流団体。100年を超える歴史ある、グローバルな視点で日本との交流を行っている。年間100件以上のプログラムをこなしている。

今回は、静岡の名誉市民・芹澤けい介展が行われていました。今静岡の芹澤美術館は、集客に困っている。ここニューヨークではかなりの人気だ。館長は、静岡や仙台に出掛けて、この企画をされたという。何故、地元でもう少し人気のスポットにできないのか残念だ。

『メトロポリタン美術館訪問』

ここも 2 回目の訪問。あまりの広さに、またまたびっくり。1870 年設立の世界最大級の美術館。古代から現代にいたるまでの、200 万点以上もの芸術品を幅広く所蔵しているという。さすが。前は子どもたちが、絵筆を持って模倣画を描いていたが、今回は大人の人と同じことをしていた。日本では考えられない光景だ。芸術に対する根本的な考え方の違いだ。各国のコーナーを駆け巡りあっという間の見学だった。空間の使い方が素晴らしい。またゆっくり訪れたいものだ。この日は、夕食後それぞれのオプションで時間を過ごした。私たちは、あの香取慎吾のニューヨーク公演を観劇。地元の知り合いに紹介いただき、チケットが取れ、夜の地下鉄にも乗車（一律 2 ドル）。とてもきれいで、治安の不安もなく快適だった。英語と日本語を駆使したミュージカル。日本で観るのとは一味違った感じだった。

11 月 18 日（金）

『自治体国際化協会（CLAIR）視察・講話』

昭和 63 年地方公共団体の共同組織として設立された。地方の国際化の推進・支援を行っている。47 都道府県・18 政令指定都市が支部になっている。中学・高校の語学指導を行う海外青年招致事業・姉妹都市交流の推進・国際交流・国際協力事業への支援などを行っている。静岡市は現在 13 名の外国語指導助手を雇用している。国際課が窓口になっている。主に、地方自治体が行う海外活動の情報提供・調査研究・自治体国際協力専門家派遣事業なども行っている。所長の講話は興味深いものだった。

地方自治がなぜ大切か。身近の事は身近のところでやる効率論。地方自治は民主主義の学校なのだ。との講話。国があるから地方があるのではない。我々の存在価値を考えるべき。

Laboratorie(ラボラトリー)とデモクラシーとの違い。地方自治は、民主主義の価値を高める普段の実験場だ。そのためには、自由と責任が必要だ。なのに、ラボラトリーをさせない霞が関がある。議会に何を期待されているか。市長を？助けている機

	<p>関でいいのか。二院代表制のアメリカと議員内閣制のイギリス。君主制をなくすために生まれた制度。最高執行機関の大統領。それぞれの事例から学ぶ日本。地方自治における、予算を立てる権利の保障。地方での税金の使い方。何故、議院内閣制ではなく、2院代表制なのか考えるべきだ。生活に大事なことは国にやらせない。効率ではなく、コントロールが大事なこと。あやつり人形日本列島から生き生き人間列島に変えていくべきだと締めくくった所長の話には、あらためて、目の覚める思いだった。</p> <p>『アメリカ自然歴史博物館訪問』</p> <p>動植物の標本や模型を展示する世界有数の博物館。恐竜の骨格を展示した吹き抜けの展示の仕方は圧巻でした。1200人を超えるスタッフがいて、毎年100を超える特別野外探査を主催している。かなりの数の生徒・学生の見学者でごった返していた。脊椎動物の進化等が時間経過を経て理解できる展示になっていて、歴史が身近に感じられるものだった。</p> <p>11月19日(土)</p> <p>『専用バスにてニューヨーク空港へ・全日空NH-009で帰国の途に(飛行時間14時間10分)』</p> <p>長い視察終了</p>
<p>成果・市政 への反映 等</p>	<p>50周年記念式典参加の目的は達成されたと自負するところだが、それぞれの場面で反省させられたことも多々あった。この50年の交流の歴史重さは初めて関わった私には、少し軽い受け止めをしていた感があると思った。これまで、市民参加された方々と、もう少し出発前に交流しておけば良かったと思った。これからの国際交流の際は、事前研修に重きを置きたいと思った。これからは国際課の方にも、指導をお願いしたい。市民の方と同行の場合は、シングルルームを主にした方がいい場合もあるので検討していただきたい。旧清水で行われていた国際交流のやり方と旧静岡でのそれには少し違いがあるように思うので、両者のコミュニケーションが必要だ。姉妹都市が増えたと、国際化事業も増えているので、ホスピタリティーの指導研修も必要だと実感した。がしかし、この視察研修を通して出会った人たちや事柄は今後の私の糧となるものでありますので、今後の活動に活かしていきたい。</p>